
明後日、世界が終わります。

たみはと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明後日、世界が終わります。

【Nコード】

N3007M

【作者名】

たみはと

【あらすじ】

ひきこもり女102号（通称）の元にひきこもり支援課を名乗る男、たむらがやってくる。
さらに、102号の部屋と、肉体を狙って謎の男子生徒もやってくる。

元ひきこもりで元小説家、現在フリーターのおっさんもやってくる。

エンディングが全部世界が終わりに収束するノットマルチエンディング厨2ストーリー！

ひきこもり支援課が来た

ねむたいいや眠たくなんかない。

もうどれくらいこうして布団に包まっていただろう？

朝が来て夜も来て朝は来て夜が来て。

何回どのタイミングで繰り返したかももう忘れただから。今はどちらなのか。わからない。

ピンポン。ピンポン。

チャイムが延々鳴り続ける。もうずっと鳴ってる

昨日も、一昨日も、たぶん、その前も鳴ってる。

出られない。億劫。だるい。大儀。面倒くさい。臭い。眩しい。痛い。若年性床ずれ。戦略的腐敗。煩い。患い。輪辛いも。それにだって私はこのまま朽ちて婆になり埋葬されるくらいの気概が有ったんじゃないか違うのか？

（これは神様かもしれない）

父だったか母だったかいつか変れない私のまま大人に聞かされた言葉を思い出す。

（いけない子は神さまにつれて行かれるものだ）

これはざいあくかんだろうか、だとしたらまだ在ったことに驚いた。とつくに磨耗したつもりでいたので。

「ひきこもり支援課です」

ドア越しの声呼びかけてくる。

「ひきこもり支援課の者です」

と言われて空けるひきこもりの者は何人居たのだろう。『ひきこもり支援課の者です』と言われて空けられない人間だから私たちはひ

きこもり足りえたのではないか。

「空木荘102号室さん」

それは名前じゃなくて住所。

「開けますよ」

そして本当にドアは開く。

名はたむらと言った

「あなたの担当になった、たむらと言います」
「たむら」

「はい。102号さんがひきこもりを脱せるように、これからお手伝いさせていただきます」

たむらはきちんとした身なりで、整った顔立ちの男だった。

「これは、どういった機関が行っているサービスなのですか」

「行政です。厚生省健康局傘下で各自治体の保健所が行っています」
なるほど確かに公務員らしい装いかもしれない。

しかし同じくらいそれらしくない気する。

ちよつと端正すぎる。

「ニユースはご覧にならないのですね」

「ええ、見ての通りに」

うちにはテレビどころかラジオも無い。

「お手紙も差し上げたのですが」

それも見ての通り見ていなかった。

「わかりました。では、また明日のこの時間にまたお伺いします。

その時また、ご説明させて頂きます」

たむらが立ち上がる。たむらの腰掛けていた場所に積もっていた埃が盛大に巻き上がりまるで粉雪のように降り注いだ。

地獄のような光景の中で、ひきこもり課の彼は、

「ひきこもり支援課発行の手引きのほうを置いてゆきますので、よく読んでおいてください」

と端正に告げた。

もちろん読む気など起こらない。

手引き！読まなきゃ！ダメ！絶対！

「読まなかったのですね」

昨日彼が来た時間と同じ針の位置の頃に彼は来た。

「うちの鍵を、どこで手に入れたのですか？」

「あれほど読んで下さいと頼んだのに」

たむらは悲しそうな顔で手引きを拾い上げる。

「では、要約して差し上げましょう」

そしてそれがすべて嘘だったかのように朗々と言葉をつむぐ。

「あなたのところに毎日僕が来ます。あなたが外へ出るまで来ます」
につこりと笑いもする。

「永遠に」

本当にそんなことを書かれている手引きが役所から発行されるだろうか。

「私、たぶん死ぬまで部屋に居ますよ」

「では、死ぬまで通うと思います」

私はどれくらい生きるだろうか。たむらは私より少し年上に見えるが、彼が死ぬまで生きているとも思えない。それに公務員には転勤も定年もあるから永遠なんて。

私が個人が死ぬまで国に手間を掛けることは変らないが。

「そうですね。がんばってください」

布団に包まる。話はわかったので帰って欲しいという意思表示を行ってみた。

「がんばります。手始めに102号さんの電話線を切りました」
たむらは引き続きにつこりにこにこしている。

「僕が食料も、生活必需品も運んで差し上げます。だから、まず、ご自分でドアを開けて、僕を迎え入れられるようになってください」
国は一体何を考えているのだろう。こんなことなら、手引きをちゃんと読んでおくんだった。

あんあんあーあ（前書き）

ちよつと暴力的性的場面

あんあんあーあ

ピンポンピンポンピンポン。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

ドアを開けなければどうなるのだろう。と思い試した結果がこれだった。

（鍵は持っているはずなのに……）

あくまで私が開けるのを待つつもりのようなのだ。

（都合がいい。このままほうっておこう）

食料は僅かだがまだある。

それに、少しの間なら何も食べなくなっても平気だ。

蛇口をひねれば水だつて出る。

ピンポン

気がついたら眠っていた。

起き上がるとカーテンが風でびゅうびゅうと揺れている。

ベランダの窓が、開いているのか？ わたしはここ数年開けた事など一度も無い。

「あつ」

後ろから羽交い絞めにされ、あつという間に両手を縛られた。

驚いて前のめりに倒れる。髪の毛を掴まれて今度は口を塞がれた。

必死に足をバタつかせたが馬乗りになられてすぐ封じられた。

「動くなしゃべんな」

こどもの声だ。男の声か？

まだ幼く聞こえた。

耳の後ろに冷たいものを当てられる。刃物だ、と思った。
シチュエーション的にその手のものしかありえない。

「ここ、あんた一人で住んでる？」

うなずいた。住んでる。

「じゃあ、かくまって。開いてる部屋、ある？住ませろ」
開いている部屋はある。かくまう？すむ？別に構わない。

（ただ、わたしは家から出ない、ひきこもりで、キミの世話は

「人に、いうなよ。誰にも言うな。言うな。わかるか？」

言わない。言えない。だって、知り合いいない。

本当は三秒くらいいたむらの顔が浮かぶ。

「よし、じゃあ、」

声がうわずる。確実に少年だと思った。

「誰にも言えなくしてやる」

着古した寝間着が毛り上げられる。冷たくて、汗ばんだ指だ。刃物が
シユンという爽やかな音と共にフローリングをすべり下り、遠ざ
かっていく。私を律しているのは酷く熱くなつた骨のお化けだ。力
チャカチャとベルトの外れる音が聞こえるなんてベタな。意外と力
が強い。だけど、驚異的なほどではないはずだ。

逃げられる。

でも、逃げられてどうしよう？

「あ、あ、あ、あ、あ、あああつ」

あーあ。

食材を持ったたむらが来た

ピンポン。

「はい」

ドアを開けたら荷物を抱えたたむらが立っていた。

「こんにちはようやく開けてくださいましたね」

「……スーパーの袋？」

「ええ。僕がついさつき買ってきました」

たむらは断らずに部屋にあがる。

一直線に冷蔵庫へ向かっててきばきと食材を補充し始めた。

「宅配便より便利だな」

「でしょう」

そう言つて笑いかけたたむらの表情がそのまま固まった。

「いやな匂いがする」

私は稀なことに替えの寝間着に身を包んでそのまま布団に座っている。

たむらはすぐにベランダのサッシが割られていることに気づいた。

真っ白い靴下を汚しながら駆け寄る。

「僕以外に誰か来たのですか？」

たむらは私に背を向けているので表情は見えない。

「まさか」

一笑に伏した。

それと共に股がずきずき痛む。

「しかし」

たむらは遠慮なく部屋を睨めまわす。

何か言いたげだった。私は何を言われるのか待とう、と思った。

「……わかりました。では、僕を自分から招き入れることが出来たので、次のプログラムに移りましょう」

頷きも、否定もせず、黙ってたむらの言うことを聞いた。

「明日、同じ時間に伺います。いつものように待っていてください」
こちらに向けられたたむらの顔は、相変わらず端正だった。そして、
仕草も。

たむらは端正に屈み、端正に部屋のはじめに転がっていた包丁を拾って、
端正に私に手渡した。

「あと、おとしものですよ。102号さん」

少年が居る

押入れを開けると少年が寝転んでニンテンドーDSをしていた。

「あ、客、帰った？　じゃあオレご飯作るよ」

笑いかけられる。こうしてみると、随分若く、華奢だ。

私の机上にあったのを、移動させられた電気スタンドが、それを照らす。

「ここ、せまくなかったの」

純粹な疑問から聞く。

「別に。ていうか、せまくても、自由にできればいいし」

自由に。って、どの程度自由にするつもりなのだろうか。

こっちも純粹に疑問だ。が、尋ねるのは躊躇われる。

昨晚のような。いや、いや。それより金がかかるほうが参る。

「まあ、あんまり負担はかけないようにするから」

察されたのか、すでに冷蔵庫を開けている少年が、こっちを向いた。

「あんたひきこもりなんだね」

とても澄んだ目だった。

「オレそういう友達いたし、気持ちわかるよ」

ことばも澄みきっていた。

澄みすぎて、地上にはもはやなく、どこにも響かないまま消える。

私は黙りこくった。

好きで黙りこくっているとか、何かの反抗意志を伝えたいとかではなく、言うことがない。

「うまいもの作るよ」

「それは、うれしい」

ようやく言うことがみつかった。

「お姉さんは、処女だったの？」

またみつからなくなった。

「血が出てたもんなあ。うん。オレも、初めてだったんだ。だから

感動して、何だか、お姉さんの顔を見ると、胸がドキドキするよ」
キミが、下手だから、血が出たのだよ。

ということ、彼を逆なでせず伝える方法はないのか。

「そう」

ないようなので断念。

「オレ、家事も手伝うし、バイトもするよ？　だから、これから仲良くやっていこうよ」

少年が布団に乗り込んできた。

冷蔵庫の扉は開いたまま、選ばれた食材は出しっぱなしになっている。

「ねえお姉さん」

押し付けられてわかるがまた熱い。

いかにも栄養が不足していそうな体のに、どこにこんな熱量を隠しているのか。

「お姉さん。ねえ。食事の前にやりたいよ」

少年の肌はとても白くてきめ細やかなのに、のびすぎに見える髪は真っ黒でボサボサなように。

冷蔵庫は必死に食材を冷やそうとしている。

ひきこもりタイプテスト

「たむらです」

たむらが来た。

「今日は102号さんがどのタイプのひきこもりなのか、テストで調べます」

たむらが出してきたのは、ワープロで打ちだしたような手作り感溢れる紙だった。

「マークシート式です」

マークシートは、学校で使われそうな本物っぽいもの。

「質問は僕が読み上げます。共同作業です」

渡されたシャープンを片手に机に向かう。

「はいかいえに印をつけてください。どちらでもない、は、極力選ばないようにお願いします」

ベランダからの風が壊されたサッシを抜け、我々に吹き付けている。

「ねこより犬が好き」

「いいえ」

「人より犬が好き」

「はい」

「好きなものを先に食べるタイプだ」

「いい」

「口には出さなくていいですよ」

そうか。

人と触れあいたくない。

はい。

人の目がこわい。

いいえ。

怖くなくなったからこうなった。

おっくう。

生きているのが辛い。

どちらか。

生きていること自体はそんなに辛くない。

将来に不安がある。

はい。

この先はどうなるのだろう。

いつまでこれが続けるのだろう。

「最後の質問です。自分は変われる、と思う」

高らかに笑い声が響く。

天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ。

ワハハハ。ワハハハハ。ワハハハハハハハハハ。

少年はおうちに帰りたくない

マークシートを裏返す。

「お疲れさまでした」

たむらはにっこりと微笑む。

「一度、課の方に帰って結果を出して参ります。夕方頃に、お伺いしましょう」

そう言い残してたむらは出て行った。

「お姉さん帰った？」

同時に少年が押し入れから飛び出してくる。

「帰ったよ」

「やつべえ！ 押し入れて、長時間いるとキツイわ。意外に」
すっかり汗をかいたようだ。

荒くれた髪がベタベタと肌に張り付いている。

「きみって、髪長いよね」

言うど、ああ、と短くつぶやいて。

「切りにいく金もらえなくて。自分でやって、失敗したらヤバイし」

「切ろうか」

見ていると暑い。

「できるの？」

「いつも自分の髪切ってるから。多少」

彼の顔がやたら嬉しそうに輝く。

割に合わないくらい。

さつと服を脱いで、ゴミ袋を引いて上に座った。

「はい！」

「……慣れてるね」

「子どもの頃はよく、母さんに切ってもらってたからさ」
ハサミを持ってきた。

気になるところに刃を入れていく。

「オレってガリガリだよな」

自分の体を見下ろして言った。

「そうかもしれないね」

でもきみには女を犯せるほどの力がある。

「きずだらけでみつともないし」

確かに彼は傷だらけだったが触れないようにしていた。

「うち、母さんが再婚してさ」

瞬間、私の第六感が目覚めた。

きみのお義父さんは、きみのことをいじめている！

そうだ、それしかない！これは、サービス問題！

「、」

はつと気がつくと、何も聞こえていなかった。

内心のテンションが上がりすぎて、少年の言葉を聞き漏らしてしまった。

「……だから、もう帰らないんだ」

「そうなんだね」

どのだからなのかわからなかったが、とりあえず頷く。

第六感を信じたい。

少年が黙ったので、これ幸いとハサミを動かしていた。

「ねえ、さっきの奴って、お姉さんのこと好きなんじゃない」
「思ったら、変なことをいう。」

「なんで」

聞いたら、まっすぐ。

「なんだかそういう風に思うんだよ」

第六感なんて信じるもんじゃない。

「そんなには短く切らないからね」

でも足元には少年の髪が山ほど散らばっている。

「量多いな」

「お姉さんはオレと結婚するべきだよ」

まっすぐ。まっすぐ言う。

まっすぐまっすぐ。

「お姉さんはオレと初めてセックスしたんだから、オレと結婚した
ほうがいいんだよ。絶対、絶対そうなんだ」

そんなに短く切らない、と言っただけでもっと短く切ることにする。

彼と同じ部屋にいと、暑くてかなわない。

色々どうでもいいので、何がどうなってもどうでもいいの巻

「散髪をされていたのですか」

片づける間のなかった大量の髪を見て、たむらが言った。

屈んで、ごっそりと手のひらに握る。

「傷んでますね。栄養が足りていないのでは？」

「結果はどうでしたか」

あまり興味はないがとりあえず聞いた。

「ああ……」

髪のを握りしめたまま呟いたたむらもあまり興味がなさそうだった。

「102号さんは、隠居型ひきこもりでした」

「へえ」

「とにかく面倒で外に出たくないようです。過去はともかく、現状ひどく差し迫った悩みはありません。一見、悟りを開いたように穏やかですが、何の希望もなく、後は死ぬだけのタイプです」

大変遠慮のない物言いだった。

このテストは繊細なひきこもり仲間の死期を早めるだろう。

私はその大きな可能性を思った。

「傷つきましたか」

たむらがじつと私の目をのぞき込んでくる。

「いえ。かなりいい線だと思いました」

「そう。このように、余り傷つかないのも隠居型の特徴です。色々どうでもいいので、何がどうなったってもうどうでもいいのです」
凄まじいどうでもいいの応酬だった。

「これがわかって、何の役に立つんです」

「ひきこもり別の対処法があります。あなたは、何か愉快だ、と思えることを探さなければいけません」

「愉快だ、と思うことくらいあります」

その後にく言葉、たむらは待った。

私も、そのうち何か出てくるだろうと思っ待った。

時は過ぎ、夜風が入り込むほどだった。

押し入れの少年は干からびて死んだだろうか。

「……」

……。

「明日から、愉快なことを探しましょう。僕の友人を連れて参ります。彼と話しながら、貴方も考えてみてください」

たむらが私の肩を叩いた。

「ワハハハ」

声を出して笑ってみた。

たむらはそのまま帰っていった。

少年は押し入れの中で、胎児のように眠っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3007m/>

明後日、世界が終わります。

2010年10月14日12時08分発行